★輝いてます

鷲尾麻衣さん

（相生町・20歳）

新成人を対象に募集した「はたちの願い」作文で優秀賞を受賞。

二十歳の節目に何か形を残したいと思い、今回、応募しました。

この作文を書いてから、じきに「ばあちゃん」は亡くなりましたが、病院では看護師さんが本当によくしてくれました。

今は、私自身、看護師そして助産師になることを目指して、やる気満々です。

二十歳の節目に

鷲尾麻衣

私の高校は進学校で、自分も大学へ行く事が当然と思っていた。たいした熱意もなく私大へ進学。受験生活と一変し、自由に遊んだ。友達の輪も行動範囲もぐっと広がりバイトも始めた。車の免許をとったり、夏休みは泊まりがけの旅行をしたり。学校もそこそこにこなした。何と楽しいんだろう。しかし、そんな生活も一年経つと普通になってしまった。私は学校へ通うのが面倒になった。心から志望して入ったわけでもないし、講義は「こなしている」本当にそれだけで、感動することもなければ実も結ばなかった。初めて疑問に思った。四大を出て流れの就職をし適当な結婚をする。私はそんなの夢に見てた？高い学費を一年も払ってもらったが、両親は私の退学を許可してくれた。私はパソコンの資格をとろうか、英検を受けようか、将来役に立ちそうな資格の取得を考えた。辿り着いたのは看護資格だった。安易な理由だ。就職する際にこぼれがないし、出産後の復職もしやすいと思ったのだ。打算的であるがとりあえず受験勉強を始めた。看護師になるには三年間看護系の学校へ行かなければならないのだ。久々に本腰をいれて励んだ。五月だった。

夏半ば。バイトに身が入って、疎かになる学業。当然と言えば当然だ。大学受験同様、熱意がないのだから。更に尻を叩いてくれる先生もいないのだ。両親の手前、勉強している姿勢は示した。私には今年八十四になる最愛の祖母がいる。私は外孫だが近所である故、幼少時から、ばあちゃん、ばあちゃんと後をついて回ったものだ。電動車椅子で墓参り、そばを食べに行ったり、ただ一日中話したり。多い時は週に4日も祖母の傍らにいた。どんな友達より会っていた。祖母も私の来訪を心待ちにしてくれていた。そんな祖母が入院したのが9月24日。大分辛そうだが、今年中には歩いて退院できるのだ。毎日病院へ通っては、私は5時間も6時間も一緒にいた。見てわかる、弱っていく。車椅子に乗せ外の空気を吸っても、最上階へ景色を見に行っても祖母は体を折って下を向いている。寝ている時間も増えた。それでも手術をすれば治ると信じていた。発作を起こしたのが10月21日。何だろうこのたくさんの機械は。祖母の顔は違う人の様だ。手を握ると温かい。でも決して握り返してはくれない。私は怖くなった。何だろうこの急展開は。今、私は病院に行けずにいる。私が行く度に「帰らないで」と言ってくれたのに、今は目も開けてくれないのだ。私の振り袖を楽しみにしていたんじゃなかったの？私の運転で猿を見に行くんじゃなかったの？熱い風呂に入るんでしょ？故郷の九州へ連れてってくれるって言ったじゃん。怖い。死んだりしたら嫌だからね。

私は看護師になる。祖母を看護してくれる姿に感動したからとかではないが。ばあちゃん、私将来の目標決めた。ふらふらしないから安心して。

二十を迎えた今年、いろんな事があった。母の交通事故に、父の入院、祖母の入院。私は何の役に立っただろう。誰かの支えになっただろうか。祖母の死を感じて思う。あと二十年たったら父は七十二だ。夕食は一緒に食べよう。私の結婚まであと何年だろう。休日は家で過ごそう。一見暗くみえる今年だが精神的な転機の年だ。無償で応援してくれる両親や祖母に、初めて孝行したいと思った。頼ってもらえる存在に私はなりたい。ばあちゃん、教えてくれてありがとう。二十になっても三十になっても私はずっとばあちゃんの孫だよ。

「はたちの願い」優秀賞の皆さん

（50音順／敬称略）

石井幸希（大東町）、加藤景子（二本木町）、黒川友香（大東町）、国分幸花（篠目町）、小西香織（桜井町）、菅原陽子（大東町）、関戸加代子（里町）、服部麻美（住吉町）、細川あき（大東町）、鷲尾麻衣（相生町）